

研究報告

看護大学に在籍する学生の課外活動と 社会人基礎力との関連性

Relationship between Extracurricular Activities and 'Fundamental Competencies for Working Persons' in regard to Students Majoring in Nursing Science

石川美智子¹⁾ 板倉 朋世¹⁾ 松本 明美²⁾
Michiko Ishikawa Tomoyo Itakura Akemi Matumoto

1) 獨協医科大学看護学部

2) 国際医療福祉大学

1) Dokkyo Medical University School of Nursing

2) International University of Health and Welfare

要旨 〈目的〉サークル活動、ボランティア活動及びアルバイト活動などの課外活動が、看護大学に在籍する学生の社会人基礎力とどのように関連しているかを明らかにする。

〈方法〉看護系大学の1年次から4年次までの学生859名を対象とし、社会人基礎力について、無記名自記式質問紙にて調査した。分析は課外活動の時期についてはMann-WhitneyのU検定及び課外活動の頻度における得点の差についてKruskal-Wallis検定を行った。

〈結果〉回収603(回収率70.2%)、有効回答590を分析の対象とした。「大学生時代に課外活動を行っている」学生は「活動をしていない」学生に比べ、社会人基礎力が高い結果を示した。Kruskal-Wallis検定を行った結果、大学生時代にサークル活動を行っている群は傾聴力及び柔軟性、状況把握力の3項目、ボランティア活動の結果は、主体性、課題発見力、計画力、創造力、柔軟性の5項目、アルバイト活動は主体性および課題発見力の2項目において有意差が認められた。

「大学生時代に課外活動を行っている」学生を対象として活動頻度による差を検討した結果、有意差が認められる項目はなかった。

〈結論〉本研究において、課外活動と社会人基礎力の関連について以下の示唆を得た。

1. 「大学生時代に課外活動を行っている」学生は「大学生時代に課外活動を行っていない」学生に比べ、社会人基礎力が高い結果を示しており、大学生時代に行う課外活動は社会人基礎力を高める要因となっている可能性が示唆された。

2. 課外活動の頻度と社会人基礎力の向上には、関連性が認められなかった。

キーワード：社会人基礎力、課外活動

I. 緒言

1. 背景

現代の若者について、高松¹⁾は、2000年に

行われた経済協力開発機構の国際学習到達度調査の結果をもとに、自分の考えを表現することが苦手であり不足していると、学力だけでなくコミュニケーションをはじめとする社会活動

に必要な能力が低いと指摘している。金子²⁾は、大学入学が50%を超えたことをユニバーサル化と表現し、それに伴い学生の質が変化したと指摘している。基礎的な学力が不十分なだけでなく、まず自主的な勉強の習慣をもたない高校生が大学生となっていると述べている。

1990年代以降に生じたビジネス環境の変化などにより、若者が社会に出るまでに身に付ける能力と職場等で求められる能力とが十分にマッチしていないことがクローズアップされてきたことを受けて経済産業省は、「社会人基礎力に関する研究会」の2006年の中間取りまとめの報告書³⁾のなかで、職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力」として提唱した。それは、3つの能力「前に踏み出す力（アクション）——歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力」「考え抜く力（シンキング）——疑問を持ち、考え抜く力」「チームで働く力（チームワーク力）——多様な人と共に、目標に向けて協力する力」とし、その下位項目は12の能力要素で構成されている（図1）。これらは、

いずれの専門分野の学生に対しても共通して求められる能力要素であり⁴⁾、特に「主体性」「状況把握力」「ストレスコントロール力」は看護大学に在籍する学生（以下看護大学生とする）にも一致して求められるものである⁵⁾。吉本ら⁶⁾は学校教育の仕上げとしてのキャリア教育という点から考える看護師のコンピテンシーとして求められるのは、新人看護師としての専門的な能力よりもいわゆる社会人基礎力であると述べており、看護大学生のうちに社会人基礎力を高める方策が求められているとされる。大半の看護大学生は卒業後の進路は明確であり、在学中から将来の職業生活をイメージし、看護職能としての資質・能力を高めるよう期待されている。いわゆるキャリア教育の一面も濃い看護大学生の社会人基礎力に関する先行研究では、北島⁷⁾が看護大学4年生を対象として社会人基礎力と看護実践力の相関について質問紙調査をした結果、正の相関を認めたと述べている。

また、瀧澤⁸⁾は社会活動に必要な能力は、本来成長する過程で自然と身につくスキルであり、地域社会や学校、課外活動や友人同士の付



図1 社会人基礎力3つの能力と12の要素

出典 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kenkyukai.htm>.

き合いの中で育まれるはずのスキルであると指摘する。中でも課外活動については、都留⁹⁾を筆頭にその教育的意義が支持されている^{10,11)}。松尾は「良質な経験を積ませることが、優れた人材を育成する鍵となる」¹²⁾として課外活動を経験学習と位置づけ、その学習のメカニズムを探る重要性を説明している。しかし昨今の大学生は、サークル活動等の課外活動に消極的であるとの報告^{13,14)}もあり、自然と身につけることができると言い難い状況であるとも言われ、「社会人基礎力」の育成が大学教育に求められる今日的課題であると指摘される。看護大学生もその例外ではなく、高松が指摘するような現代の若者像と同様の課題をかかえる学生が増えていると濱田¹⁵⁾や酒井¹⁶⁾も述べている。課外活動に関する看護大学生を対象とする先行研究では、宮脇らによる報告がある。宮脇ら¹⁷⁾は1年生5名の看護大学生を対象として職業的社会化に関する質的データに基づいて、アルバイトやボランティア活動が一人の社会人として求められる態度や価値を見出す効果があると述べている。

そこで本研究は、サークル活動、ボランティア活動及びアルバイト活動に限定した課外活動と社会人基礎力にどのような関連性があるかを明らかにすることを目的とする。これによって、看護大学生に期待されている社会人基礎力、とりわけ自主性やコミュニケーション力などの伸長に効果的な教育のあり方を追求するに際しての示唆が得られるのではないかと考えられる。

2. 用語の定義

- 1) 社会人基礎力：経済産業省の「社会人基礎力に関する研究会」¹⁸⁾の指針に基づき、職場や地域社会の中で多様な人々と仕事をしていくために必要な力と定義した。
- 2) 課外活動：学校の教科学習（正課）外の活動を指す。その中で、中央教育審議会大学分科会の調査結果による学生生活の課外の活動として大きな位置を占めている¹⁹⁾サークル活動、ボランティア活動、アルバイト活動に限定して課外活動とする。

II. 研究方法

1. 対象

関東北部にある看護系学部、学科を有する4年制大学の中から便宜的標本抽出法により2校を抽出した。2校共に調査協力の同意が得られたので、各大学の1年次から4年次までの学生を対象とした。

2. 調査方法

調査票は、無記名自記式質問紙を用いた。質問紙の配布は集合配布とし、講義室にて依頼文及び質問紙を配布し、文書と口頭による説明を行い研究の協力を依頼した。質問紙を説明し研究者が退室した後、学生は回答した質問紙を添付の封筒に入れて封をして郵便ポスト或いは学内に設置した回収ボックスに個別に投函するものとした。郵送法及び回収ボックスによる留め置き法にて回収した。

3. 調査期間 2012年9月～2012年12月

4. 調査内容

- 1) 基本属性：年齢・性別・学年。
- 2) 課外活動の種類：クラブ・サークル活動／ボランティア活動／アルバイト活動。
- 3) 課外活動の時期：大学生時代における課外活動の有無による社会人基礎力の違いを明らかにするために、大学在学中の活動であるかどうかを鑑みて、4つの選択肢を設定した。「現在行っている：大学生である現在行っている」、「以前大学生時代に行っていた：現在は行っていないが、大学入学後行っていた時期がある」、「高校時代以前に行っていた：高校時代を含め大学生になる前まで行っていたが大学生になってからは行っていない」、「行ったことは無い：課外活動を行ったことはない。」の4つの選択肢を設定した。
- 4) 課外活動の頻度：大学生の生活についての中央教育審議会大学分科会の調査結果²⁰⁾を参考に、「毎日活動している」、「週に1～2回以上」、「月に1～2回以下」、「今までに5回程度」の4つの選択肢を設定した。
- 5) 社会人基礎力の測定：北島らによる「看

護系大学生の社会人基礎力の構成要素」自己評価 36 項目の尺度²¹⁾を使用した。これは「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の 6 段階リッカートスケールを使用している。この尺度は北島らにより、「経済産業省が提示しているプロGRESSシートを参考に項目が作成され、その内容の洗練が看護学基礎教育の教育関係者によって行われている。さらに 3 分類 12 能力要素から構成される 3 次因子分析モデルによって構成要素の信頼性と妥当性が確認されているものである。」として、その信頼性が確認されている。

5. 分析方法

- 1) 社会人基礎力の 3 つの能力（アクション、シンキング、チームワーク）及び 12 の能力要素の得点が 4 学年間で差が有るか Kruskal-Wallis 検定により分析した。P<0.05 を有意差ありとした。有意差があるものについては多重比較を行った。
- 2) 学生が課外活動を行っている時期を「現在行っている」群と「以前大学生時代に行っていた」群を合わせ「大学生時代に課外活動を行っている」群とし、「高校生時代以前に行っていた」群及び「行ったことはない」群を合わせて「大学時代には課外活動していない」群とする 2 群に分け、社会人基礎力の 3 つの能力（アクション、シンキング、チームワーク）及び 12 の能力要素の得点に相違があるか、Mann-Whitney の U 検定により分析した。P<0.05 を有意差ありとした。
- 3) 学生が行っている課外活動の頻度について、社会人基礎力の 3 つの能力及び 12 の能力要素の得点が 4 つの選択肢の中で差が有るか Kruskal-Wallis 検定により分析した。P<0.05 を有意差ありとした。有意差があるものについては多重比較を行った。
- 4) 上述した「大学生時代に課外活動を行っている」群の学生を対象として、活動の頻度により社会人基礎力に差が有るかに

ついて Kruskal-Wallis 検定により分析した。P<0.05 を有意差ありとした。

以上の 1)～4) に関する分析は、統計ソフト SPSS Statistics 20.0 for Windows を使用した。

6. 倫理的配慮

対象となる学生には、以下の内容を依頼文書及び口頭で説明した。①調査は無記名で行い、データはコード化し統計的処理を行うことにより個人は特定されない。②今後受ける学業には一切影響は無い。③研究への参加協力は自由であり、研究に参加しないことにより不利益をこうむることは一切無い。④途中からの離脱も可能である。⑤回答後添付の封筒に入れて封をしたのち郵便ポスト或いは回収ボックスに任意で投函してもらう。⑥研究者の連絡先を調査票の表紙に明記しており、この調査についての不明な点や疑問などに対応する。⑦ここで収集されたデータはこの研究以外には使用しない。⑧そのデータの管理は厳重に行い、研究終了後はシュレッターにより破棄する。などである。郵便ポスト或いは回収ボックスへの投函をもって研究への参加の承諾を得たものとした。尚、本研究は獨協医科大学生命倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. 分析の対象

質問紙を 859 名に配布し、603 名から回答を得た（回収率 70.2%）。社会人経験を有する者の実数は少ない上に、先行研究²²⁾においては就労経験の有無により社会人基礎力に有意差があるとされていることから、社会人経験者を分析の対象から除外した。さらに記入不備のあるものを除外し、有効回答 590 名を対象とした。なお、属性及び社会人基礎力の平均得点を表 1-①に示した。

9 性別では、男性 62 名（10.5%）女性 528 名（89.5%）であった。学年別の構成では、1 年生 141 名（23.9%）、2 年生 187 名（31.7%）、3 年生 123 名（20.8%）、4 年生 139 名（23.6%）、平均年齢は 19.9 ± 1.2 (Mean \pm SD) 歳であった。

表 1-① 研究対象の属性および学年別社会人基礎力得点

学年	社会人基礎力3つの能力											
	性別			アクション			シンキング			チームワーク		
	人数 (%)	男子	女子	中央値	平均値	平均ランク	中央値	平均値	平均ランク	中央値	平均値	平均ランク
1年生	141名 (23.9%)	19名 (30.6%)	122名 (23.1%)	36	37.0	317.1	33	33.6	280.6	76	76.1	314.5
2年生	187名 (31.7%)	22名 (35.5%)	165名 (31.2%)	36	35.5	281.3	34	33.2	277.5	72	72.7	258.6
3年生	123名 (20.8%)	13名 (21.0%)	110名 (20.8%)	35	34.5	243.6	35	33.3	281.0	72	72.0	244.5
4年生	139名 (23.6%)	8名 (12.9%)	131名 (24.8%)	37	37.3	338.6	36	35.4	347.7	79	79.0	371
合計	590名 (100%)	62名 (100%)	528名 (100%)	36	36.1		34	33.8		74	74.8	
平均年齢	19.9歳±1.2 (Mean±SD)						Kruskal-Wallis 検定 **<.01			***<.001		

表 1-② アクションについての学年間の多重比較

学年	検定統計	調整済み有意確率
3年生-1年生	73.51	.003 **
3年生-2年生	37.72	.335
3年生-4年生	-95.00	.000 ***
2年生-1年生	35.79	.354
2年生-4年生	-57.28	.016 *
1年生-4年生	-21.49	1.000

*<.05 **<.01 ***<.001

表 1-④ チームワークについての学年間の多重比較

学年	検定統計	調整済み有意確率
3年生-1年生	70.06	.005 **
3年生-2年生	14.1	1.000
3年生-4年生	-126.55	.000 ***
2年生-1年生	55.97	.019 **
2年生-4年生	-112.46	.000 ***
1年生-4年生	-56.49	.033 *

*<.05 **<.01 ***<.001

表 1-③ シンキングについての学年間の多重比較

学年	検定統計	調整済み有意確率
3年生-1年生	-.44	1.000
3年生-2年生	3.56	1.000
3年生-4年生	-66.7	.009 **
2年生-1年生	3.12	1.000
2年生-4年生	-70.26	.001 **
1年生-4年生	-67.14	.006 **

**<.01

2. 課外活動の状況

課外活動の時期及び頻度について、表 2 に示した。

1) 課外活動の時期 (表 2A)

590 名のうち、サークル活動について回答し

たのは 555、ボランティア活動について回答したのは 476、アルバイト活動について回答したのは 547 であった。

課外活動の時期の選択肢として、「現在行っている」群と「以前大学生時代に行っていた」群は大学生時代に課外活動をしていることになる。この 2 つの群を合わせた「大学生時代に活動を行っている」群においてサークル活動について回答した割合は 76.8%、アルバイト活動について回答した割合は 80.8% であった。ボランティア活動については「行ったことはない」と回答した割合が 36.3% であり、「高校時代以前に行っていた」群の 38.4% を加えると、大学生時代にボランティア活動を行っていない学生の割合は 74.7% にのぼるという結果であった。

表2 課外活動の時期及び頻度

A. 課外活動の時期	サークル		ボランティア		アルバイト	
	N	%	N	%	N	%
現在行っている	343	61.8%	54	11.3%	326	59.6%
以前大学時代に行っていた	83	15.0%	66	13.8%	116	21.2%
高校生時代以前に行っていた	73	13.2%	183	38.4%	29	5.3%
行ったことはない	56	10.1%	173	36.3%	76	13.9%
合計	555	100%	476	100%	547	100%

B. 課外活動の頻度	サークル		ボランティア		アルバイト	
	N	%	N	%	N	%
毎日	71	15.1%	2	0.8%	48	10.9%
週1～2回以上	276	58.8%	25	9.8%	339	77.2%
月1～2回以下	75	16.0%	80	31.4%	24	5.4%
今までに5回程度以下	47	10.0%	148	58.0%	28	6.4%
合計	469	100%	255	100%	439	100%
頻度について未記入*	30		48		32	

*「頻度について未記入」=表2A「合計」-表2「行ったことはない」-表2B「合計」によって得られた数である。

2) 課外活動の頻度 (表2B)

課外活動の頻度について表2Bに示した。表2Aの合計から「行ったことはない」と回答した群及び頻度についての未記入を除外した総数を100%として、割合を示した。サークル活動は、「毎日」の群及び「週に1～2回以上」の群を併せて73.9%であり、アルバイト活動では「毎日」の群及び「週に1～2回以上」の群を併せて88.1%に上るが、ボランティア活動では「毎日」の群及び「週に1～2回以上」の群を併せて10.6%と低く、さらに「今までに5回程度以下」しか活動していない群では58.0%と高かった。

3. 社会人基礎力得点

1) 学年別の社会人基礎力得点

社会人基礎力を構成する3つの能力(アクション, シンキング, チームワーク)について平均値で比較すると、どの能力においても4年生の値が最も高く、次いで1年生の値が高くなっていた。学年間の得点の差についてKruskal-Wallis検定(有意水準<.05)を行った結果、3つの能力共に有意差が認められた(アクション

ン $P=.000$, シンキング $P=.001$, チームワーク $P=.000$) (表1-①)。さらにすべての学年間で多重比較を行った結果有意差を示したものを表1-②～④に示す。アクションでは、3年生-1年生($P=.003$), 3年生-4年生($P=.000$), 2年生-4年生($P=.016$)で有意差が認められた。シンキングでは、3年生-4年生($P=.009$), 2年生-4年生($P=.001$), 1年生-4年生($P=.000$), チームワークでは、3年生-1年生($P=.005$), 3年生-4年生($P=.000$), 2年生-1年生($P=.019$), 2年生-4年生($P=.000$), 1年生-4年生($P=.033$)で有意差が認められた。

2) 課外活動の時期による社会人基礎力得点

社会人基礎力を構成する12の能力要素である主体性, 働きかけ力, 実行力, 課題発見力, 計画力, 創造力, 発信力, 傾聴力, 柔軟性, 状況把握力, 規律性, ストレスコントロール力の各得点は, ShaPiro-Wilk検定により正規性は認められなかった($P<0.05$)。平均値と標準偏差を計算し, 天井効果及びフロア効果の認められる項目は無いことを確認した。

課外活動の時期による社会人基礎力の能力の

表3 課外活動の時期による社会人基礎力の能力の比較

能力	12の能力要素	活動時期	サークル活動			ボランティア活動			アルバイト活動		
			N	平均ランク	P値	N	平均ランク	P値	N	平均ランク	P値
アクション	主体性	大学生時代に活動している	426	281.47	.341	120	272.32	.001**	442	280.45	.044*
		大学生時代に活動していない	129	266.53		356	227.10		105	246.84	
	働きかけ力	大学生時代に活動している	426	282.07	.267	120	257.80	.070	442	277.28	.309
		大学生時代に活動していない	129	264.57		356	231.99		105	260.21	
	実行力	大学生時代に活動している	426	284.11	.098	120	258.38	.063	442	278.45	.169
		大学生時代に活動していない	129	257.83		356	231.80		105	255.25	
シンキング	課題発見力	大学生時代に活動している	426	280.37	.519	120	263.70	.018*	442	281.38	.022*
		大学生時代に活動していない	129	270.17		356	230.01		105	242.94	
	計画力	大学生時代に活動している	426	279.14	.758	120	264.15	.017*	442	276.47	.446
		大学生時代に活動していない	129	274.24		356	229.86		105	263.60	
	創造力	大学生時代に活動している	426	277.79	.954	120	262.18	.027*	442	279.98	.065
		大学生時代に活動していない	129	278.70		356	230.52		105	248.84	
チームワーク	発信力	大学生時代に活動している	426	280.05	.572	120	252.32	.191	442	275.36	.672
		大学生時代に活動していない	129	271.22		356	233.84		105	268.29	
	傾聴力	大学生時代に活動している	426	287.00	.014*	120	255.38	.111	442	273.74	.937
		大学生時代に活動していない	129	248.28		356	232.81		105	275.08	
	柔軟性	大学生時代に活動している	426	289.63	.001**	120	264.51	.014*	442	273.72	.931
		大学生時代に活動していない	129	239.58		356	229.73		105	275.16	
	状況把握力	大学生時代に活動している	426	285.61	.036*	120	249.39	.302	442	277.69	.248
		大学生時代に活動していない	129	252.87		356	234.83		105	258.47	
	規律性	大学生時代に活動している	426	282.91	.181	120	248.54	.346	442	272.08	.552
		大学生時代に活動していない	129	261.78		356	235.12		105	282.10	
	ストレスコントロール	大学生時代に活動している	426	283.98	.104	120	247.72	.387	442	273.93	.826
		大学生時代に活動していない	129	258.26		356	235.39		105	274.29	

Mann-Whitney の U 検定 * < .05 ** < .01

比較を表3に示した。課外活動の時期を「現在行っている」群と「以前大学生時代に行っていた」群を合わせ「大学生時代に活動している」群とし、「高校生時代以前に行っていた」群及び「行ったことはない」群を合わせて「大学生時代に活動していない」群とする2群に分け、Mann-Whitney の U 検定により社会人基礎力の相違を検討した。

サークル活動において12の能力要素の平均ランクで見ると、チームワークの能力要素である傾聴力 (P=.014)、柔軟性 (P=.001)、状況

把握力 (P=.036) の項目で有意差が認められた。

ボランティア活動において12の能力要素の平均ランクで見ると、アクションの能力要素である主体性 (P=.001)、シンキングの能力要素である課題発見力 (P=.018)、計画力 (P=.017)、創造力 (P=.027) の項目において有意差が認められた。

アルバイト活動において12の能力要素の平均ランクで見ると、アクションの能力要素である主体性 (P=.044)、シンキングの能力要素である課題発見力 (P=.022) の項目において有

表4 大学生時代に活動している人の活動頻度による社会人基礎力の差の検定結果

		サークル活動 N=426	アルバイト活動 N=442
3つの能力	12の能力要素	有意確率	有意確率
アクション		.253	.382
シンキング		.891	.109
チームワーク		.586	.448
アクション	主体性	.213	.190
	働きかけ力	.403	.422
	実行力	.237	.621
シンキング	課題発見力	.958	.316
	計画力	.840	.242
	創造力	.671	.182
チームワーク	発信力	.982	.279
	傾聴力	.976	.332
	柔軟性	.978	.898
	状況把握力	.614	.614
	規律性	.179	.275
	ストレスコントロール	.096	.554

Kruskal-Wallis 検定

意差が認められた。

有意差の認められた項目は、いずれも「大学生時代に活動を行っている」群の平均ランクが高かった。

3) 課外活動の頻度による社会人基礎力得点の差

サークル活動及びアルバイト活動について、「大学生時代に課外活動を行っている」学生(サークル活動 N=426, アルバイト活動 N=442)を対象として活動頻度による差があるかについて、活動の頻度4群において Kruskal-Wallis 検定を行った。サークル活動・アルバイト活動の頻度による社会人基礎力の差の検定結果を表4に示す。いずれも有意差は認められなかった。ボランティア活動においては、「毎日活動している」と答えた群が N=2 と極端に少なく、「週1~2回以上」の群と併せても N 数は 30 に満たないことから、十分な検定量とは認められず、分析から除外した。

IV. 考察

1. 本研究対象者の属性と社会人基礎力の関連性

学年別の得点ではいずれの能力の得点も4年生が最も高くなっており、各学年間の差について Kruskal-Wallis の検定において有意差が認められた。多重比較において、アクションでは、2年生および3年生に比べ有意に4年生が高く、シンキング、チームワークにおいては、他の3学年に比べ4年生が有意に高い結果であった。北島ら²³⁾も1年生と4年生を比較し、有意に4年生が高いとしている。最終学年においては社会人基礎力が高くなる傾向がみられる。これは看護大学在学中の学びが蓄積された結果の反映であり、社会人基礎力が高められる傾向にあることは、看護教育の成果の一つではないかと考えられる。

2. 課外活動の時期による社会人基礎力得点の相違

「大学生時代に活動している」群における課外活動の有無による社会人基礎力の違いを明らかにするために、時期を「大学生時代に活動している」及び「大学生時代に活動していない」の2つに区分して、社会人基礎力得点の差について Mann-Whitney の U 検定を行った。

その結果、サークル活動を行っている学生では、12の能力要素のうち傾聴力及び柔軟性、状況把握力の3項目に有意差が認められた。いずれもチームワーク力を構成する能力要素である。また、傾聴力と柔軟性の2つはコミュニケーション能力を示す項目であるともされる²⁴⁾。サークル活動の教育的効果について宮脇²⁵⁾は強い仲間意識をもつと指摘する。一方金子²⁶⁾は大学生調査の結果をもとに、人間的な成長及び大学での生活をエンジョイしたと学生が評価していると述べる²⁷⁾。大学生時代にサークル活動をすることによって得た仲間を通じて、コミュニケーション能力を高め、チームワーク力を育んでいるといえる。

ボランティア活動は、自信や明るさを得ることができる²⁸⁾など教育に効果的であるとする報告も多い²⁹⁻³¹⁾。宮脇ら²⁹⁾はボランティア活動について「一般の人たちと交流できることで、視野を広げることに繋がっている」と述べている。今回の調査におけるボランティア活動の結果は、主体性、課題発見力、計画力、創造力、柔軟性の5項目において有意差が認められた。これらの能力要素は、3つの能力すべてに渡っているが、特にシンキングは構成要素の全てに有意差が認められた。平均ランクにおいては、「大学生時代に活動している」群が有意に高くなっている。大学生時代にボランティア活動をすることは、広い視野で考え、実現に向けての工夫や企画する能力などが高められているのではないかと考えられる。

アルバイト活動は主体性および課題発見力の項目、それぞれアクション、シンキングを構成する能力要素において有意差が認められた。何れの項目も「大学生時代に活動している」群の

平均ランクが高くなっていた。アルバイト活動について、経済産業省が「人との交流や異質な世界との出会いや評価を体験させる過程こそが社会人基礎力育成の過程そのものである」³⁰⁾と述べており、関口³¹⁾はアルバイト経験の質的側面(仕事特性と取り組み姿勢)と量的側面(アルバイト時間)について調査した結果をもって、アルバイト経験は「学校と職業生活とを結ぶ橋渡しとなりうる」と述べている。まさに異質な世界との出会いを果たす過程において積極性や視野を拡大する力を培っていると考えられ、学生時代に課外活動として行うアルバイト活動は、社会人基礎力の伸長に寄与しているのではないかと考えられる。

以上のことから学生時代に行うサークル活動はチームワーク力を、ボランティア活動は、シンキングを、アルバイト活動はアクション、シンキングの能力を伸ばす可能性があるのではないかと考えられる。

3. 課外活動の頻度による社会人基礎力の相違

活動頻度による差があるかをさらに検討するため、「大学生時代に課外活動を行っている」学生(サークル活動 N=426, アルバイト活動 N=442)を対象として、サークル活動及びアルバイト活動について分析した結果、有意差が認められる項目はなかった。ボランティア活動においては、十分な統計量を得られなかったため分析から除外した。

アルバイト活動による学習効果の発現は単に活動の時間だけではなく、職務内容に関係するという関口³¹⁾の報告がある。本研究ではそれぞれの課外活動の活動内容を調査出来ていないが、単純に活動頻度が高い程社会人基礎力が高まるという関係性はないようである。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究の調査対象が2校のみであることはこの研究の限界である。

しかし課外活動を大学生時代に行うことは、社会人基礎力と関連がある可能性が示唆された。だがボランティア活動をしている学生の人数が少なく、活動頻度について十分な分析を行えなかった。今後さらに活動内容や対象数を増

やすなど更なる調査が必要であると考えられる。

V. 結語

本研究では、サークル活動、ボランティア活動及びアルバイト活動に限定した課外活動が看護大学生の社会人基礎力とどのような関連性があるかを明らかにする目的で、看護大学生に質問紙調査を実施し、以下の知見を得た。

1. 学年ごとに比較した社会人基礎力の平均値は4年生が最も高い値を示した。4年生はいずれの能力においても有意に高い傾向が認められた。
2. 「大学生時代に課外活動を行っている」群は、「大学生時代に課外活動を行っていない」群に比べ、社会人基礎力が高い結果を示した。大学生時代にサークル活動を行っている群においてはチームワーク力、ボランティア活動においてはシンキング、アルバイト活動においてはアクション、シンキングの能力に有意差が認められた。大学生時代に課外活動をすることは社会人基礎力と関連している可能性があるとの示唆を得た。
3. 社会人基礎力と課外活動の頻度においては、明らかな関連性は見出せなかった。

謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の方々に心より感謝申し上げます。尚、本研究は平成24年度獨協医科大学看護学部共同研究助成を受けて行った研究であることを記します。

【文献】

- 1) 高松克之：社会人基礎力—社会が求めている力とは何か—, 埼玉女子短期大学研究紀要, 21, 379-403, 2010.
- 2) 金子元久：大学教育の再構築, (初版), 玉川大学出版部, 東京, 2013.
- 3) 経済産業省ホームページ <http://www.meti.go.jp/Policy/kisoryoku/kenkyukai.htm>. (アクセス 2011/5/18)
- 4) 飯吉弘子：産業界のイノベーション要求の方向

性と大学教育—2000年以降の経済団体提言分析と大学教育政策瞳孔の対比, 大阪市立大学『大学教育』, 8(1), 67-77, 2010.

- 5) 吉本圭一, 立石和子：大卒看護職の初期キャリアとコンピテンシー形成—看護師・関係者インタビューの分析—, 広島大学高等教育研究開発センター大学論集, 第39集, 223-240, 2007.
- 6) 前掲書 5)
- 7) 北島洋子, 細田泰子：看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討, 大阪府立大学看護学部紀要, 17(1), 13-23, 2011.
- 8) 瀧澤道夫：社会人基礎力とスキルアップの社会学, 文教大学国際学部紀要, 20(2), 49-66, 2010.
- 9) 都留春夫：大学生の課外活動とリーダーシップ育成, 国際基督教大学学報, I-A, 教育研究 10, 123-141, 1963.
- 10) 仙崎 武：人間形成における体験の教育的意義と推進条件, 年報 (10), 81-92, 2007.
- 11) 佐藤龍子：学生の自発性を促すキャリア教育と正課外活動, 京都大学高等教育研究第13, 25-35, 2007.
- 12) 松尾睦：経験からの学習—プロフェッショナルへの成長のプロセス, (第2版), 同文館出版, 東京, 2007.
- 13) 平野 眞：大学生の課外活動離れに関する研究—中学校の部活動との関連, 東海大学紀要, 教育研究所, 1, 37-45, 1994.
- 14) 経済産業省編：社会人基礎力—育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために, (初版), 朝日新聞出版, 東京, 2010.
- 15) 濱田悦子：第2回日本赤十字看護学会学術集會会長講演—次世代を担う若者を育てよう, 日本赤十字漢語学会誌, 2(1), 1-7, 2002.
- 16) 酒井美子：コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 5, 103-114, 2010.
- 17) 宮脇美保子, 島田千恵子, 他：4年制大学における看護学生の職業的社会化—1年次の学生

- を対象として（第1報），順天堂大学医療看護学部 医療看護研究，2(1)，2006.
- 18) 前掲書 3)
- 19) 文部科学省中央教育審議会ホームページ
http://www.mext.go.jp/comPonent/b_menu/shingi/giji/（アクセス 2011/5/18）
- 20) 前掲書 19)
- 21) 前掲書 7)
- 22) 北島洋子，細田泰子，他：看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係，日本看護学教育学会，20，1-12，2012.
- 23) 前掲書 7)
- 24) 前掲書 14)
- 25) 前掲書 17)
- 26) 金子元久：高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析 2006～2008 年度調査，東京大学大学院教育学研究科大学経営政策研究センターホームページ
<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>（アクセス 2013/2/10）
- 27) 前掲書 2)
- 28) 寺山節子：ボランティアが及ぼす教育効果の実際—学生の主訴を中心に—，中国学園紀要，7，95-99，2008.
- 29) 前掲書 17)
- 30) 前掲書 14)
- 31) 関口倫紀：大学生のアルバイト経験とキャリア形成，日本労働研究雑誌，52(9)，67-85，2010.